様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：７２６２２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００００７３

研究課題名（和文）『大正新脩大蔵経』編纂の実態に関する書誌学的研究：増上寺報恩蔵本を通して

研究課題名（英文）Bibliographic Study on the Compilation of Taisho Shinshu Daizokyo: Comparison with the Ming Edition Possessed by Zojo-ji Ho'onzo

研究代表者
會谷　佳光（AITANI, Yoshimitsu）

公益財団法人東洋文庫・研究部・研究員

研究者番号：５０４４５７１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：『大正新脩大蔵経』とその底本・校本に用いられた西蓮社本の比較を通して、『大正蔵』編纂の実態解明に取り組み、下記の成果を得た。
『大正蔵』は従来の指摘の通り底本・校本の再現性・正確性の点で問題があるだけでなく、『大正蔵』自体も版によって様々な異同があり、校定が必要である。『大正蔵』巻末略符の分析を通して、初版の第28回配本（第33巻）で、古写本を用いた校訂大蔵経から、江戸時代の刊本を使った大蔵経へと質的な転換を果たしていたことを明らかにした。上記の問題点、研究成果を活用して、「『大正新脩大蔵経』底本・校本データベース」と「西蓮社（旧増上寺報恩蔵）蔵嘉興版大蔵経目録データベース」を構築して公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究で行った『大正蔵』の凡例の分析研究と「『大正新脩大蔵経』底本・校本一覧データベース」の構築によって、いま手にしている『大正蔵』がいつの配本で、なにを底本・校本に用い、どのような方針・背景のもと編纂校合されたものかを踏まえた上で、より有効に利用することが可能となった。また『大正蔵』に誤脱等が多いことはよく知られているが、その版の違いが意識されることはなかった。これはWeb上で使われるようになった現在でも変わりない。しかし、初版の和装本と洋装本にも印刷状態に起因したテキストの異同があり、洋装本を補訂した再刊本、再刊本のリプリントである普及版との間にも様々な異同があることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Through a comparison of the Taisho Shinshu Daizokyo and the Ming edition possessed by Yurenja that were used as the original and collated texts of Taishozo, I have attempted to clarify the compilation process of Taishozo.
Taishozo is problematic not only in terms of the reproducibility and correctness of its original and collated texts, as pointed out previously, but there are also differences between its various editions which need to be collated. Through the analysis of the abbreviations at the end of Taishozo, it was clarified that in the 28th distribution of the first edition (volume 33), a qualitative shift was made from a collated Buddhist canon using old manuscripts to a Buddhist canon using books printed in the Edo period. Utilizing the above issues and research results, I constructed the "Original and Collated Texts Database of the Taisho Shinshu Daizokyo" and "Database of the Jiaxing Edition Buddhist Canon Catalog possessed by Yurenja (former Zojo-ji Ho'onzo)".

研究分野：漢文大蔵経の書誌学的研究

キーワード：『大正新脩大蔵経』　「増上寺報恩蔵本」　西蓮社　書誌学　嘉興蔵　『大正新脩大蔵経勘同目録』　脚注　データベース（IIIF・TEI）

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

『大正新脩大蔵経』（以下『大正蔵』）は、大正 11 年（1922）～昭和 9 年（1934）に近代活字を用いて日本で出版された大蔵経であり、冊子体、WEB 上のテキスト・画像データベースなど様々な形で、仏典のスタンダードテキストとして国際的に活用されている。その一方、『大正蔵』の問題点として、編纂時の誤脱や衍文などが多いことが近年指摘されている（船山徹「漢語仏典―その初期の成立状況をめぐって」（『漢籍はおもしろい』研文出版、2008 年 3 月）所収）。仏教の教義・制度・歴史等を文献学的に正確に究明しようとするとき、そのテキストの信頼性が何よりも重要となることは言を俟たない。よって、この信頼性が『大正蔵』を編纂する際にどのような方法でどの程度担保されているのかについて、その底本・校本に用いられたテキストと『大正蔵』とを校勘するなどの方法で明らかにしておく必要がある。しかしながら、『大正蔵』の底本や校本に用いられたテキスト、たとえば増上寺の三大蔵経（高麗再彫本、宋思渓版、元普寧寺版）など、原本との照合調査が容易でないものが多く、編纂時に実際に用いられたテキストを使って問題点の実証的な解明を行うことが非常に困難な状況にある。『大正蔵』の問題点を顕在化させるには、実際に『大正蔵』の編纂に用いられたテキストで、ある程度分量のある、まとまった校勘対象が必要となる。そこで、『大正蔵』の底本の一つである西蓮社所蔵の嘉興蔵と校勘し、それによって得られた結果を分類分析することで、『大正蔵』がどのように編纂されたのか、具体的にどのような問題点を内包しているのか、これまで知られていなかった事実が見えてくるのではないかと考える。以上が、本研究課題の申請時における背景・動機である。

２．研究の目的

『大正蔵』は、現在、冊子体、WEB 上のテキスト・画像データベースなど様々な形で、国際的な仏典のスタンダードテキストとなっているが、その編纂時の誤脱や衍文の多さが近年指摘されている。しかしながら、その底本や校本に用いられたテキスト、例えば増上寺の三大蔵経など、編纂時に実際に用いられたテキストを使って問題点の実証的な解明を行うことが非常に困難な状況にある。本研究の研究代表者は『大正蔵』の底本・校本として散見する「増上寺報恩蔵本」について、2010 年より浄土宗寺院西蓮社にて書誌学的実地調査を重ねてきた。そこで、この西蓮社本と『大正蔵』とを校勘してテキストの異同等の状況を調査分析することで、『大正蔵』の編纂実態の一端を実証的に解明し、そこに内包される問題点を顕在化させることで、『大正蔵』をいかに活用すべきかを利用者に提起し、国内外の仏教研究に貢献することを目指す。

３．研究の方法

『大正蔵』が編纂された際、「増上寺報恩蔵本」として採録された 130 点 203 冊 701 巻の経典すべてに対して、逐字的に『大正蔵』とのテキストクリティークを行い、それによって蓄積された校勘結果から、文字の異同率や異同内容の傾向・原因等を分類分析して、『大正蔵』編纂の実態を明らかにする。

分析の際には、西蓮社本以外の嘉興蔵（新文豊出版社影印本、光明寺蔵本、東京大学総合図書館蔵本など）や、西蓮社本の校勘に用いられた宗教大学（現在の大正大学）蔵本などを調査して比較検討する。また、『大正蔵』自身についても、初版と昭和 35～54 年（1960～79）の再刊本とで、テキストなどに異同があるため、『大正蔵』間の異同が底本・校本との間にどのような問題を生じさせているかについても検討する必要がある。なお、東洋文庫には『大正蔵』の初版が特装の線装本で全巻所蔵されており、『大正蔵』間の異同を確認するための条件が整っている。

また本研究では、西蓮社本の簡易目録（分類、函冊、書名、巻数、附録、刊年等の情報、および『大正蔵』収録経典一覧を収録）である拙著『西蓮社（旧三縁山増上寺山内寺院報恩蔵）収蔵嘉興版大蔵経目録』（西蓮社、2012 年、http://doi.org/10.24739/00006484）の元データである詳細目録（申請当時未公開）に対して、データの校正、書誌情報の追加などの整備を施して、東洋文庫ホームページ上で公開することも計画している。

なお、本研究では、『大正蔵』に「増上寺報恩蔵本」と明記されている経典を調査対象とするが、『大正蔵』には他に、単に「明本」と記載されるテキスト群があり、この中にも西蓮社本が含まれている可能性がある。しかし分量が大量に上るため、「明本」と記載されるテキスト群に対する調査については、本研究による研究結果を踏まえて、2021 年度以降の研究課題として取り組む予定である。また、将来的には『大正蔵』と西蓮社本との相互の異同状況や、双方のテキストデータを切り替えて表示できるテキストデータベースを作成し、東洋文庫ホームページ上で公開することを検討している。

上記の申請当時の研究計画に対して、実行可能な方法を模索しつつ、具体的には下記の方法で研究を実施した。

（1）資料収集・調査

①図書購入による資料収集

西蓮社本と『大正蔵』の校勘作業、および『大正蔵』の初版・再刊・普及版それぞれの編纂経緯を解明するため、『大正蔵』普及版 18,20-47 巻、『昭和法宝総目録』第 3 巻、初版販売開始時

の『会則及内容見本』、正蔵 55 巻完成後に作成された『総目録　付会員名簿・刊行経過要略』を購入するなど資料収集を行った。

②資料調査による書誌情報・複写物の入手

2018 年度、佛教大学図書館にて、『大正蔵』の実際の底本に使われたとも言われる上海頻伽精舎校刊大蔵経（以下「頻伽蔵経」）の調査を、同館所蔵本で行い、總目をはじめ、西蓮社本と関連のある経典の一部について複写を行った。

大谷大学図書館にて、『大正蔵』の『金光明経文句文句記』の校本に使われた承応 3 年中野小左衛門刊本を調査して全文複写を行った。本調査によって、承応 3 年に『文句文句記』と合刊された『金光明経玄義拾遺記』では大正大学所蔵本が使われ、『文句文句記』のみ大谷大学所蔵本が使われており、『大正蔵』の編纂において、同一版本が複数箇所に所蔵される場合、編纂が行われた東京近郊の版本が優先的に使用され、東京近郊に所蔵がない場合に京都等の所蔵本が使用された可能性があることが明らかとなった。その他、大正大学所蔵の『金光明経玄義拾遺記』の全文複写を行い、『大正蔵』および西蓮社本との詳細なテキストクリティークを行うための資料収集を行った。

2019 年度、大谷大学図書館にて、『大正蔵』の校合担当者に配布されたと思われる『校訂備忘録』『校合内規』、『大正蔵』の底本・校本に使われた刊本 8 点の書誌調査と全文複写を行った。

（2）西蓮社本のスキャニング、および『大正蔵』とのテキスト比較

①西蓮社本のスキャニング

西蓮社本のデジタル画像撮影を迅速に行うため、2018 年度にスキャナー（富士通 SCANSNAP SV600）を購入して西蓮社に備え付け、『大正蔵』の底本・校本に用いられた西蓮社本 121 部約 20,000 コマのデジタル化を実施した（2019 年度に完了）。

②『大正蔵』と西蓮社本のテキスト比較

2019 年度に発表した論文「『大正新脩大蔵経』の初版・再刊・普及版の刊行をめぐって」（『東洋文庫書報』第 51 号、2020 年）によって、『大正蔵』は従来から知られる再刊時の補訂以外にも初版の和装本・洋装本、再刊本、普及版の間に大小様々な異同があることが判明した。

かつ『大正蔵』編纂の際、底本・校本に用いたと記録されるテキストによらず、縮刷蔵経や頻伽蔵を使った経典があると従来から指摘されていることもあり、『大正蔵』のいずれかの版を西蓮社本と比較しただけでは十分な結果が得られないことが明らかとなった。

そこで、2020 年度、本研究の目的である『大正蔵』と西蓮社本のテキスト比較について、人文系テキストデータベースの共有・継承のための国際的ガイドライン TEI（Text Encoding Initiative）を導入して実施する方針に変更し、SAT 大蔵經テキストデータベース研究会提供の『釈禅波羅蜜次第法門』の TEI テキストを元に、西蓮社本の TEI テキストを作成するべく、校勘情報のタグ付け作業を開始した。さらに東京大学情報基盤センター助教（当時。現東京大学史料編纂所助教）の中村覚氏の協力で IIIF（International Image Interoperability Framework）画像とリンクした TEI ビューワーの開発を開始した。

当初の計画では、「SAT 大正蔵新脩大蔵経テキストデータベース」からコピーしたテキストデータを西蓮社本と比較して手作業で異同を記録していく予定であったが、『大正蔵』は版によってテキストの異同があり、かつ手作業ではケアレスミスが発生する可能性がある。また、このようにして作成した校勘記録にはデータの継承性に懸念が残る。そこで、中村覚氏と相談のうえ、『大正蔵』諸版の画像を比較して異同箇所を機械的に自動判別し、かつ IIIF・TEI を活用して縮刷蔵経・頻伽蔵経と比較できるシステムを試作することとした。そのうえで西蓮社本との異同を調べることで、テキストデータ・画像データの国際規格化・継承性を確保しつつ、『大正蔵』が西蓮社本に直接依拠したのか、それとも縮刷蔵経や頻伽蔵経を使ったのかを解明する方針に変更した。これら新たに必要となった作業・システムの開発を実施するため、2021 年度まで補助事業期間を延長した。

（3）データベースの作成

2018 年度に、『大正新脩大蔵経勘同目録』（『昭和法宝総目録』第 1 巻所収。以下『勘同目録』）から抽出した初版時の底本・校本情報を、普及版の脚注に記載される底本・校本情報と比較することで、再刊時に底本・校本の追加・変更が行われたか否かを調べるため、「『大正蔵』底本・校本一覧データベース」の作成に着手した。同時に、『大正蔵』諸本の奥付画像を収集して、各巻・各版の正確な刊行年月、製本業者、編纂体制の変遷、刊行の先後や刊行頻度など、本文からでは見えてこない出版をめぐる周辺情報の一覧表を作成した。

2019 年度は、エクセル版「『大正蔵』底本・校本一覧データベース」の作成を進めつつ、これを将来的に「SAT 大正蔵新脩大蔵経テキストデータベース」と連携したものとするべく、中村覚氏、人文情報学研究所の永崎研宣主席研究員と打ち合わせを行った。

2020 年度は、中村覚氏の協力を得てエクセル版「『大正蔵』底本・校本一覧データベース」のデータベース化を進め、「『大正新脩大蔵経』底本・校本データベース」（現在の URL: https://static.toyobunko-lab.jp/taishozo/）を構築した。また、2010～12 年の西蓮社本調査の際に作成した西蓮社本の詳細目録を大幅に改訂し、中村覚氏の協力を得て「西蓮社(旧増上寺報恩蔵)蔵嘉興版大蔵経目録データベース」（現在の URL: https://static.toyobunko-lab.jp/u-renja/）を構築して、「『大正新脩大蔵経』底本・校本データベース」と連携させた（両データベースとも 2020 年 8 月完成時は非公開）。

西蓮社本の画像は当初圧縮したものを IIIF 化してデータベースに登録していたが、圧縮前の

高精細画像に差し替え、2021 年 7 月に「『大正新脩大蔵経』底本・校本データベース」を一般公開した。

４．研究成果

（1）研究の主な成果、得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究課題によって得られたおもな研究成果とその概要、その国内外における位置づけとインパクト（下線部分）については、以下の通りである。

①會谷佳光「増上寺報恩蔵（西蓮社）と『大正新脩大蔵経』の編纂―初歩的調査分析を通して」（『仏教史学研究』60(2)、2018 年）

本稿では、西蓮社本のうち『大正蔵』の底本・校本に用いられた典籍 35 部約 60 巻を対象に、西蓮社本と『大正蔵』との異同を調査し、『大正蔵』編纂の実態解明のための初歩的分析を試みた。その結果、西蓮社本と『大正蔵』の間で異同が見られる確率が 0.07%（『大正蔵』1 頁に 1 カ所以上）を超えた典籍が 35 部中 23 部あり、校勘の際、底本と校本を混同して記録し間違える例が予想外に多いなど、『大正蔵』のテキストには、底本・校本の再現性・正確性の点で非常に問題があることが改めて浮き彫りとなった。

なお、本稿は、2017 年 11 月 18 日開催の仏教史学会学術大会での報告「増上寺報恩蔵（西蓮社）と『大正新脩大蔵経』の編纂」を基礎に、大会での質疑応答を受けて改訂して『仏教史学研究』に投稿した原稿に対して、査読者の指摘等を受けて、さらに改訂を行い、2019 年 3 月に刊行された『仏教史学研究』60(2)に掲載されたもので、本研究の出発点となった論文である。

②會谷佳光「『大正新脩大蔵経』の初版・再刊・普及版の刊行をめぐって」（『東洋文庫書報』第 51 号、2020 年）

本稿では、『大正蔵』の初版和装本・洋装本、再刊本、普及版について刊行の経緯を概説しつつ、それぞれの特徴・問題点について検討した。『大正蔵』の初版は和装・洋装 2 種の装訂で刊行されたが、毎月 1 冊配本というタイトなスケジュールで編集刊行されたため編集・校合時に生じた誤脱が多いうえ、洋装本は和装本に比して印刷状態が悪く、文字のかすれ・欠落が随所に見られる。1960～79 年に再刊する際には、初版の紙型が東京大空襲で焼失したため、初版の洋装本を原本として補訂を加えてフィルム撮影した上でオフセット印刷で刊行された。しかし当初予定されていた正誤表 1 巻が結局刊行されなかったため、どこをどのような理由で何を根拠に直したかが不分明である。なおかつ補訂の限界として洋装本の脱誤を見落としたり、補訂の際に却って誤ってしまった例などが散見し、なかには補訂の信頼性に疑念を抱かせるような致命的なミスも見受けられる。また、再刊本の第 40～72 回配本にかけて、本文の補訂が間に合わず、巻ごとに印刷の不鮮明な箇所や誤字・脱字をリストアップした正誤表が作成された。普及版は再刊本の覆刻本であるが、この正誤表に基づく補訂を一部加えた原本を元にリプリントしたことで、再刊本との間にテキスト上の異同を生じることとなった。

これら『大正蔵』のテキストをめぐる問題は、初版の和装本・洋装本、再刊本、普及版のいずれかを用いれば解決するという単純なものではない。そのため、『大正蔵』を利用する際は、これら諸版と再刊本の正誤表を比較して、もし異同があれば、初版の和装本・洋装本の印刷状態の違いによるものなのか、初版の誤脱を再刊本が補訂したことによるものなのか、あるいは普及版のうち再刊本の正誤表によって補訂された部分であるのかなど、異同が生じた原因を究明して、どの版に従うべきか検討する必要があるのである。この事実は、『大正蔵』自身が校異・校定を必要としていることを示すものであって、『大正蔵』が WEB 上のテキスト・画像データベースとして活用され、世界的なスタンダートテキストとなっている現状において決して看過できない問題である。

③會谷佳光「『大正新脩大蔵経』の底本と校本―巻末「略符」・『大正新脩大蔵経勘同目録』・脚注の分析を通して」（「東洋文庫リポジトリ ERNEST」2019 年度科学研究費補助金研究成果、2020 年）

本稿では、『大正蔵』第 1～55 巻の各巻末に付される「略符」とその変遷、および『勘同目録』・脚注から見た底本と校本の採用状況について分析を試み、『大正蔵』の編纂実態に対する解明を行った。第 28 回配本の第 33 巻における変化、とくにテキストの略号に甲・乙・丙等を採用したことは、古写本を対校本に使った校訂大蔵経を目指した『大正蔵』に、大量の江戸時代の刊本を底本・校本として採用するという質的な変化をもたらしたことを明らかにした。本稿による『大正蔵』の凡例面での分析研究と、『勘同目録』と脚注から収集した底本・校本情報によって作成した「『大正新脩大蔵経』底本・校本一覧データベース」によって、『大正蔵』の読者は、自身がいままさに使おうとしている『大正蔵』の巻・経典・文章が、いつの配本で、どのテキストを底本・校本として用い、どのような方針・背景のもと編纂校合されたものかを踏まえた上で、より有効に利用することが可能となった。

④「『大正新脩大蔵経』底本・校本データベース」（現在の URL: https://static.toyobunko-lab.jp/taishozo/）

本データベースは、『大正蔵』の第一期刊行事業において刊行された正蔵部分第 1～55 巻を対象に、『昭和法宝総目録』第 1 巻掲載の『勘同目録』に記載される各経典の底本・校本に関する情報と、『大正蔵』第 1～55 巻の脚注に記載される底本・校本に関する情報とを収集した上で、『勘同目録』・脚注双方の情報を対照させ、各経典の底本・校本に関する情報を一覧できるようにしたものである。『勘同目録』・脚注はそれぞれ一長一短のある資料であるが、データベース化して横断検索できるようにすることで、双方の欠点をカバーし、かつ比較対照しつつ、底本・校

本の情報を知ることができるようになった。本データベースの構築にあたっては、西蓮社住職青木照憲氏の了承を得て西蓮社本のスキャニング画像とリンクさせ、大蔵出版株式会社の了承を得て『勘同目録』の全文画像データを作成・リンクさせ、SAT 大蔵經テキストデータベース研究会の了承を得て「SAT 大正新脩大蔵經テキストデータベース 2018 版（SAT 2018)」の各経典冒頭へのリンクを貼った。本データベースは、国内外の『大正蔵』を利用した仏教研究に資するものとなろう。

⑤「西蓮社（旧増上寺報恩蔵）蔵嘉興版大蔵経目録データベース」（現在の URL: https://static.toyobunko-lab.jp/u-renja/）

本データベースは、西蓮社が所蔵する嘉興版大蔵経の悉皆調査に基づいて作成・整理した書誌情報をデータベース化したものであり、書名目録（経典単位の書誌情報）と詳細目録（目次単位の書誌情報）を自在に切り替えることができる。西蓮社所蔵の嘉興蔵は、『大正蔵』編纂の際、その底本・校本として、「増上寺報恩蔵」の名で多くの経典が採録されたことで知られている。そこで、本データベースでは、西蓮社本のうち『大正蔵』が底本・校本として採用した経典のスキャニング画像を IIIF 化して書誌データとリンクさせ、さらに「『大正新脩大蔵経』底本・校本データベース」とリンクさせ、相互に行き来できるようにした。

④⑤はともに、2020 年 8 月の完成時は非公開であったが、2021 年 7 月にリニューアルして公開した。

（2）今後の展望

『大正蔵』は、その編纂の際に底本・校本に用いたと記録されるテキストによらず、縮刷蔵経や頻伽蔵経を使った経典があると従来より指摘されている。加えて、本研究を遂行する中で、『大正蔵』は従来から知られる再刊時の補訂以外にも、初版の和装本・洋装本、再刊本、普及版の間に大小様々な異同があり、単純に『大正蔵』のいずれかの版を西蓮社本と比較しても、十分な結果が得られないことが判明した。

当初の計画では、「SAT 大正蔵新脩大蔵経テキストデータベース」からコピーしたテキストデータを西蓮社本と比較して手作業で異同を記録していく予定であった。しかし、この方法では、大正蔵のどの版と比較するかが問題となる。さらに校勘記を含めたテキストデータの継承性を考えると、当初の計画どおりに作業を進めても、将来にわたって継承して利活用できるものとならない懸念が生じた。そこで、人文系テキストデータベースの共有・継承のための国際ガイドライン TEI によってテキストデータを作成する方針に変更し、SAT 大蔵經テキストデータベース研究会に提供いただいた『釈禅波羅蜜次第法門』の TEI テキストを使って、西蓮社本の TEI テキストを作成した。さらに『大正蔵』諸版の画像を比較して異同箇所を機械的に自動判別し、IIIF・TEI を活用して縮刷蔵経・頻伽蔵経と比較できるシステムを試作することとした。そのうえで西蓮社本との異同を調べることで、『大正蔵』が西蓮社本に直接依拠したのか、それとも縮刷蔵経や頻伽蔵経を使ったのか解明するべく検討を進めた。

上記のように、本研究課題は研究の進展によって予期せぬ方針変更に迫られ、それらによって生じた作業が、2021 年度においても十分に進展させることができなかった。

その一方、申請時点では、『大正蔵』の底本や校本に用いられたテキスト、例えば増上寺の三大蔵経（高麗再彫本、宋思渓版、元普寧寺版）や、宮内庁書陵部所蔵の宋版一切経（所謂「宮本」）のデジタル化が進み、申請当時容易に見ることができなかったテキストの公開状況に大きな変化が現れ始めている。これによって編纂時に実際に用いられたテキストを使って問題点の実証的な解明を行うことが、オンライン上で可能となり始めている。

そこで、研究計画を練り直し、『大正新脩大蔵経』底本・校本データベースを軸に、様々な底本・校本の原本に対して書誌調査を行い、かつ書影を入手し、本文テキストを作成することで、これらを組み合わせた漢文大蔵経の総合的データベースを構築することとした。本研究においても、すでに底本・校本の一つ西蓮社本 121 部をスキャンし、西蓮社本の目録と連携したデータベースを構築しているが、新たに正蔵部分 1,418 冊のデジタル化を行う計画である。これは、「３．研究の方法」で「2021 年度以降の研究課題として取り組む予定」としていたものであり、『大正蔵』の底本・校本に用いられた「明本」と記載されるテキスト群が西蓮社本であるのか否かの解明にも繋がるものである。さらに、画像データ共有のための国際規格 IIIF、人文系テキストデータベースの共有・継承のための国際的ガイドライン TEI を導入することで、仏典の国際的なスタンダードテキストたる『大正蔵』にふさわしい漢文大蔵経データベースに拡充し、デジタル空間上に文献学的研究のための研究基盤を構築することを目指すこととした。この研究計画を「漢文大蔵経の文献学的研究基盤の構築：『大正新脩大蔵経』底本・校本 DB の活用と拡充」と題し、2021 年度の基盤研究(A)に申請して採択された（21H04345）。よって、本研究はこの基盤研究（A)に継承して、引き続き『大正蔵』と西蓮社本のテキスト比較に取り組んでいく。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 會谷佳光	４．巻 2019年度科学研究費補助金　研究成果
２．論文標題 『大正新脩大蔵経』の底本と校本―巻末「略符」・『大正新脩大蔵経勘同目録』・脚注の分析を通して	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東洋文庫リポジトリERNEST	６．最初と最後の頁 1-45,他図等
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24739/00007257	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 會谷佳光	４．巻 51
２．論文標題 『大正新脩大蔵経』の初版・再刊・普及版の刊行をめぐって	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東洋文庫書報	６．最初と最後の頁 27-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 會谷佳光	４．巻 60(2)
２．論文標題 増上寺報恩蔵（西蓮社）と『大正新脩大蔵経』の編纂―初歩的調査分析を通して	５．発行年 2018年
３．雑誌名 佛教史學研究	６．最初と最後の頁 70-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

１．著者名 公益財団法人 東洋文庫（石塚晴通　高橋智　豊島正之　佐藤悟　斯波義信　大谷節子　齋藤真麻理　大谷俊太　浅野秀剛　會谷佳光　幾浦裕之　岡崎礼奈　加藤良輔　川合奈美　木下優友　清水信子　丹藤真子　三村一貴　瀧下彩子）	４．発行年 2021年
２．出版社 山川出版社	５．総ページ数 200
３．書名 岩崎文庫の名品	

〔産業財産権〕

〔その他〕

『大正新脩大蔵経』底本・校本データベース https://static.toyobunko-lab.jp/taishozo/ 西蓮社(旧増上寺報恩蔵)蔵嘉興版大蔵経目録データベース https://static.toyobunko-lab.jp/u-renja/ 會谷佳光「西蓮社の明版大蔵経とデータベース化事業」 『浄土』八十八巻2・3月号、法然上人鑽仰会、2022年、17頁

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関